

B-VI-5

外傷性遷延性意識障害患者の胃瘻造設術における経鼻内視鏡の有用性

¹自動車事故対策機構 岡山療護センター NST, ²脳神経外科,

³岡山西大寺病院 外科

○梶谷伸顕¹³, 本田千穂¹², 久山伸子¹, 成清治子¹, 八木良子¹, 松村望東美¹,
萬代眞哉², 衣笠和孜², 西本詮²

【目的】近年、摂食嚥下障害患者における栄養補給ルートとして胃瘻が増加している。これは管理上の問題だけでなく、摂食嚥下訓練目的、またリハビリ時間獲得・褥瘡予防のための半固形化食投与目的も含まれる。当院でもこれらの目的で胃瘻造設を行っている。造設手技としては、従来Pull法を行っていたが、Introducer法の変法で経鼻内視鏡により造設可能なDirect法が考案されたためこれに変更した。今回我々は、遷延性意識障害患者の胃瘻造設術における経鼻内視鏡の有用性について検討したので報告する。【対象】平成19年1月より平成20年3月までに行った経皮内視鏡的胃瘻造設術(PEG)14症例を対象とした。男女比は男性8例、女性6例、平均年齢は男性35.9才、女性25.3才であった。【結果】手技は、Pull法6例(以下P群)、Direct法8例(D群)で、Direct法は平成19年6月に開始し、これ以降の9例中8例はDirect法だった。P群では、緊張が強く鎮静後に開口器を用いたのが4例、開口器が不要なかったのが1例、小児(10才)で全麻となったのが1例であり、D群は、8例中6例が緊張、開口障害があったが、経鼻内視鏡で出来るため開口器の必要が無く、鎮静のみで施行可能であった。また、腹部手術既往はVPシャント術が、P群で1例、D群で5例あったが、全例とも合併症は無く経過した。【考察】、Pull法では、緊張が強く開口障害例には、鎮静後に開口器を用いなければならないが、Direct法は、経鼻内視鏡により造設可能であるため開口の必要が無く、しかも内視鏡挿入は一度でよく、また径が24Frと大きいいため半固形化食の注入も可能である。【結語】外傷性遷延性意識障害患者において、とくに緊張があり開口障害のある患者のPEGには、経鼻内視鏡によるDirect法は非常に有用である。